

昔むかし、あるところに、貧しい男とその妻がいました。息子がひとりありましたが、この子はひどくわがままで、なまけもので、親のいうことを聞きませんでした。親たちは、この子をどうしていいか分からなかったので、機織り職人の親方にあずけて修業させることにしました。

ある日のこと、親方が、この若者に、紡ぎ糸のたばを運ぶようにいいつけました。ところが、運んでいるとちゅう、村の子どもたちが集まって遊んでいるのに会いました。若者は、糸のたばをぜんぶ地面において、いっしょに遊び始めました。遊んでいるあいだに、だれかが、糸のたばを盗んでいってしまいました。若者は手ぶらで親方の所にもどりました。親方は、若者をさんざん鞭で打ったあげく、追い出してしまいました。

若者は、歩いて行きましたが、どこへ行けばいいかわかりませんでした。パンもお金も持っていません。お腹が空いてすっかり疲れてしまいました。

そのとき、とつぜん、むこうに、大きな目の見えないデフが羊の番をしているのが見えしました。若者は、

「あのデフのあとをつけていって、こつそりあいつの家にしのびこもう。何か食べる物があるだろう」と考えました。

日が暮れると、デフは、羊の群れを追って家に帰りました。そして、戸口のところに両足を広げて立ちました。それから、羊を一頭ずつ自分の股の下をくぐらせて、家の中に入れました。目の見えないデフは、羊にさわって数を数えました。若者は、一頭の大きな雄羊のお腹の下毛にしっかりとつかまってかくれていました。

デフは、羊を数え終わると、よくこえた羊を一頭殺して焼いて、半分だけ食べました。もう半分はあしたの朝のためにとっておきました。それから、横になって眠りました。

デフが寝てしまうと、若者は、羊の肉の残りをこつそりたいらげました。

つぎの朝、デフは、肉がなくなっているのに気づきました。

「だれだ。わしの肉をぬすんだのは」と、デフは腹を立てて大声でいいました。「出てこい。おまえには何もしないから」

若者は、出てきて、

「ぼくがあんたの肉を食べてしまったんだ。どうかぼくの父親になつてください」とい

いました。デフはいいました。

「よろしい。おまえはわしの息子になれ」

デフと一緒に暮らすようになって、若者は何の心配もなくなりました。毎日、羊の群れの番をして、自分の目玉のようにたいせつにめんどろをみました。

あるとき、デフが若者にいいました。

「息子よ、羊の群れをあの黒い山につれて行ってはいけないぞ。あそこに行ったら、おまえは二度と生きてはもどれないからな」

これを聞くと、若者は、その黒い山へ行きたくなくなりました。

朝になると、若者は、羊の群れを黒い山へつれて行きました。山を登っていくと、黒い毛皮を着て黒いつえを持ったひとりの羊飼いが立っていました。そのまわりには黒い羊の群れがいて、黒い犬が羊の番をしていました。黒い羊飼いは、若者に、

「おまえはだれだ。おれの山に登って来て、しかも羊までつれてくるとは、いったい何事だ」とさげびました。若者は、

「どうして怒ってるんだ。けんかしないで、将棋でもして遊ぼうよ」といいました。黒い羊飼いは、

「よし、いいだろう」といって、ふたりは腰をおろして賭け将棋を始めました。けれども、若者は、負けつづけ、羊の群れをほとんどとられてしまいました。残っているのがあと十頭になったとき、若者は考えました。

「もういちど賭けてみよう。きっと最後には運が向いてくるさ。もし今度も負けたら、どこか遠くへ逃げてしまえばいいだけさ」

ふたりは賭けをつづけました。すると、今度は若者が勝って、黒い羊だけでなく毛皮もつえも犬も、ぜんぶ取ってしまいました。黒い羊飼いは、すってんてんになって帰って行きました。

夕方、若者は、羊の群れを追って帰りました。そして、デフに、

「お父さん、羊の数を数えてください」といいました。デフは、羊を数えて、数が倍になっっているのにおどろきました。若者は、

「ほらね、お父さん。ぼくは、あの黒い山に行ってきたんだ。黒い羊飼いからどれほどたくさんの羊を賭けでとってきたか、わかったでしょう」といいました。デフはいいました、

「分かった、息子よ。でも、あの赤い山にだけは、行つてはいけな。二度と生きてはもどれないからな」

これを聞くと、若者は、その赤い山へ行きたくなくなりました。

朝になると、若者は、羊の群れを赤い山へつれて行きました。すると、赤い毛皮を着て赤いつえを持った羊飼いがいて、そのまわりには赤い羊の群れがいました。赤い犬が羊の番をしていました。赤い羊飼いは、若者に、

「おまえはだれだ。おれの山に登つて来て、しかも羊までつれてくるとは、いったい何事だ」とさげびました。若者は、

「どうして怒つてゐるんだ。けんかしないで、将棋でもして遊ぼうよ」といいました。

ふたりは腰をおろして賭け将棋をしました。若者は、赤い羊だけでなく毛皮もつえも犬も、ぜんぶ勝ち取りました。赤い羊飼いは、すつてんになつて帰つて行きました。

若者が羊を連れて帰ると、デフはいいました。

「おまえはすばらしい息子だ。だが、あの白い山にだけは、羊の群れをつれて行つてはいけな。あそこに行つたら、おまえは二度と生きてはもどれないからな」

これを聞くと、若者は、白い山へ行きたくなくなりました。

朝になると、若者は、羊の群れを白い山へつれて行きました。山を登つていくと、白い毛皮を着て白いつえを持った羊飼いが立つていました。そのまわりには白い羊の群れがいて、白い犬が羊の番をしていました。白い羊飼いは、若者に、

「おまえはだれだ。おれの山に登つて来て、しかも羊までつれてくるとは、いったい何事だ」とさげびました。若者は、

「どうして怒つてゐるんだ。けんかしないで、将棋でもして遊ぼうよ」といいました。

ふたりは腰をおろして賭け将棋を始めました。けれども、若者は、負けつづけ、羊の群れをほとんどとられてしまいました。残っているのがあと十頭になったとき、若者は考えました。

「もういちど賭けてみよう。きつと最後には運が向いてくるさ。もし今度も負けたら、どこか遠くへ逃げてしまえばいいだけさ」

ふたりは賭けをつづけました。すると、今度は若者が勝つて、白い羊だけでなく毛皮もつえも犬も、ぜんぶ取つてしまいました。白い羊飼いは、すつてんになつて帰つ

て行きました。若者の羊は、大変な数になったので、どこへつれて行ったらいいかわからないほどでした。

若者が、家に帰ると、デフはいいました。

「息子よ、上出来だ。だが、むこうの森にだけは近づいてはならない。わしは、あの森に入ってしまったがために目が見えなくなったのだ」

つぎの日、若者は、羊を連れて向こうの森へ行きました。行ってみると、たくさんの草があつて、羊たちはお腹いっぱい草を食べました。若者は、羊を一頭つぶして焼いて、食べ始めました。すると、ひとりのおばあさんがあらわれて、若者のとなりに腰をおろしていいました。

「お若いかた、わたしにも肉をめぐんでおくれ」

若者が、肉をひと切れやると、おばあさんは、

「立つて行つて、もう一頭つぶしておいでよ」といいました。

若者は、立ち上がると、後ろからこっそりおばあさんに近づきました。そして、おばあさんの長い髪かみの毛を木の幹みきにぐるぐるまきにして、おばあさんを木にしぼりつけました。そして、

「父さんの目の光を奪うばつたのはおまえだな。どうやったら、父さんの目を治なおせるかいんだ。さもなくば、おまえを細かくひちぎつてやるぞ」といいました。

おばあさんは、すっかりふるえ上がっていました。

「どうか殺すのだけはやめておくれ。森のおくのわたしの家に行くんだ。そこに、わたしの娘むすめがいるから、その娘に、わたしが命いのちの布ぬのをあんたに持ってきてほしいといつていと伝えるんだ。娘はその布をあんたに渡わたしていうだろう。『ここにすわつて、おしゃべりをしましょう』と。けれど、すわるんじゃないよ。布を持って急いで家に帰るんだ。あんたの父親の庭にわに、黄金おうごんの泉いずみがあるから、布を泉の水でぬらして、父親の目にのせると、目は見えるようになる。そして、あんたは、自分の頭あたまをその泉で洗あらうんだよ」

若者は、おばあさんの家に行きました。すると、そこに、いちど見たら二度と目が離はなせないほど美しい娘うつくがいました。若者はいいました。

「あんたのお母さんが、命の布をよこしなさいといっているよ」

娘は、若者に命の布をわたして、

「まあ、わたしのそばにすわつて、少しおしゃべりをしましょう」といいました。その

とたん、若者は、刀をぬいて娘をまっふたつにしました。それから、もどつて行つておばあさんもまっふたつにすると、羊の群れを連れて家に帰りました。若者が、命の布を黄金の泉につけて、デフの目に乗せると、デフは、たちまち目が見えるようになりました。若者が、自分の頭を黄金の泉につけると、髪の毛が黄金色にそまつてきらきら輝きました。

「わしの財産はすべておまえの物だ」と、デフはいいました。

やがて、若者は、ふるさとの家が恋しくなりました。そこで、

「お父さん、ぼくは、あなたを愛しています。だけど、もういちどふるさとに帰りたくなりました」と、デフにいいました。

デフは、いいました。

「よろしい、息子よ。行きなさい。馬小屋に、馬が三頭つないであるから、そのうちの一頭に乗りなさい。あとの二頭はおまえについて行くだろう。馬と別れるとき、それぞれの馬から毛を一本ぬいてしまつておきなさい。必要なとき、その毛を取り出して呼ぶと、馬はすぐにかけて足でやつてくるだろう」

若者はデフに別れをつげました。

馬小屋に行つてみると、黒い馬と赤い馬と白い馬がつないでありました。黒い馬のくらは、美しい黒い衣装が結びつけてあり、赤い馬には赤い衣装、白い馬には白い衣装が結びつけてありました。若者が、そのうちの一頭に乗ると、あとの二頭は、後ろからかけ足でついてきました。

若者が馬に乗つていったのは、長いあいだだったか短いあいだだったか。しまいに、ある町に着きました。若者は、馬から下りて、それぞれの馬から毛を一本ずつ引きぬくと、放してやりました。そして、自分の頭には羊のぼうこうをかぶつて、金の髪の毛をかくしました。

若者は、お城に行つて、召使いは要らないかとたずねました。すると、がちよう番としてやつてくれました。

若者は、毎朝がちようを野原へ追つていき、夕方にもどつてきました。羊のぼうこうをかぶつたままだだったので、お城の人たちは、若者をはげ頭のがちよう番と呼びました。

さて、王さまには、お姫さまが三人ありました。三人ともたいへん美しかったのですが、一番美しいのは末のお姫さまでした。あるとき、末のお姫さまが、まどから見てい

て、がちよう番の羊のぼうこうの下から金色の巻き毛まがのぞいているのに気がつきました。巻き毛は火のようにかがやいていました。お姫さまは、若者のことがすっかり気に入ってしまいました。

あるとき、王さまは、お姫さまたちに夫おつとを選えらばせようと考えました。そして、国じゅうの男たち集めて一列いちれつに並ならばせました。

「この中から、気に入った者を夫にしなさい」と、王さまはいいました。上の娘は大臣を選んでそのひぎにすわりました。二番目の娘は、軍隊ぐんたいの指揮官しきかんを選びました。末の娘はだれも選ばませんでした。

「わたしの気に入っている人は、ここにいません」とお姫さまはいいました。王さまは、「ここにいないというのは、いったいだれのことだ」とききました。すると、おつきのものが、

「ここにいないのは、はげ頭のがちよう番だけです」と答えました。

「行つてその男をここに連れてこい」と、王さまが命令しました。

若者が連れて来られると、末のお姫さまは、若者のひぎにすわりました。王さまは、かんかん腹をたてました。上のふたりのお姫さまは、ふたりをばかにして笑わらいました。王さまは、末のお姫さまとがちよう番をお城から追い出しました。そこで、ふたりは、貧しいがちよう小屋こやで暮くらさなければなりませんでした。

ある日のこと、お妃さまけいさまが病氣びようきになりました。お妃さまは、「命の水がなければ、わたしは死しんでしまいます」といいました。そこで、上のふたりの婿むこたちが、馬に乗つて泉をさがしに出かけました。若者も馬を貸かしてほしいといいましたが、追り返されてしまいました。

若者は、黒馬の毛を取り出して馬を呼びました。たちまち黒馬があらわれました。若者は黒い衣装を身につけ、黒馬に乗ると、あつというまに泉に着いて、命の水をくみましました。帰るとちゅう、上のふたりの婿たちがやって来るのに出会いました。若者は、「ここにあなたがたの求もとめている命の水があります。わざわざ遠とくまで行かなくてもこの水をあげましょう。そのかわりに、あなたがたの耳たぶを切つて、わたしにください」といいました。ふたりの婿は、これがはげ頭のがちよう番だと気づかないで、耳たぶを切つてわたしました。若者は、ふたりに命の水をわたすと、お城に帰りました。そして、また羊のぼうこうをかぶつて、がちよう番のすがたになっていました。

ふたりの婿は、お妃さまに命の水をわたしました。けれども、お妃さまの病氣は、たいていよくありませんでした。お妃さまは、

「命のぶどうがなければ、わたしは死んでしまいます」といいました。そのぶどうのある山は、竜りゅうが見張みはつていて、ぶどうの支柱しちゅうはへびでできていて、ぶどうを支柱に結びつけているのは、ひもではなくてとかげでした。

上のふたりの婿たちが、馬に乗って命のぶどうをさがしに出かけました。若者も馬を貸してほしいといいましたが、やっぱり追い返されてしまいました。

若者は、白馬の毛を取り出して馬を呼びました。たちまち白馬があらわれました。若者は白い衣装を身につけ、白馬に乗ると、あつというまにぶどう山に着いて、命のぶどうをつみました。帰るとちゅう、上のふたりの婿たちがやって来るのに出会いました。

若者は、

「ここにあなたがたの求めている命のぶどうがあります。わざわざ遠くまで行かなくてもこのぶどうをあげましょう。そのかわりに、あなたがたの背中せなかをわたしの馬に一発いっぱつずつらせてください」といいました。ふたりの婿は、これがはげ頭のがちよう番だと気づかないで、白馬に背中をけらせました。馬のひづめの跡あとがふたりの背中にくつきりとつきました。若者は、ふたりに命のぶどうをわたすと、お城に帰りました。そして、また羊のぼうこうをかぶって、がちよう番のすがたになっていました。

ふたりの婿は、お妃さまに命のぶどうをわたしました。ぶどうを食べたとたん、お妃さまの病氣は、すっかりよくなりました。

しばらくして、よその国と戦争せんそうが始まりました。人びとはみな戦争の準備じゅんびをしました。

上のふたりの婿たちも、馬に乗って戦場せんじょうに出かけました。

若者は、野原へ行って、赤馬の毛を取り出して馬を呼びました。たちまち赤馬があらわれました。若者は、赤い衣装を着て、赤い刀を腰につけ、赤馬に飛び乗って、まっすぐに戦場へかけつけました。

若者が戦場に着いたのは、ふたりの婿たちの軍勢ぐんせいが打ち負まかされて、王さまも向きを変えて逃げ出そうとしていたときでした。若者は赤馬とともに、敵てきの軍勢をかたっぱしからなぎ倒たおしました。敵は、ふるえ上がって逃げ出しました。そのとき、若者は手に傷きずを負いました。すると、王さまがかけよって来て、若者の傷に布をまいてやりました。

王さまは、勝利を勝ち取ってお城に帰りました。けれども、若者は、野原に行つて、

赤馬を放すと、はげ頭のがちよう番のすがたになって、小屋に帰りました。

王さまは、勝利の大宴会しょうり だいえんかいをもよoshしました。宴会には、すべての家来けらいを招まねきました。

王さまは、ひとりひとりに、自分でワインをついで歩きました。が、手に布をまいているあの勇者ゆうしやはいませんでした。

「ここに全員ぜんいんが集まっているのか。それとも、だれかいものがあるのか」と王さまは聞きました。

「はげ頭のがちよう番だけがいません」

「では、あの男もここに連れて来て、どこかのすみにすわらせておけ」

人々は、若者を連れて来て、部屋へやのすみにすわらせておきました。王さまは、この若者にもワインをついでやりました。すると、若者の手に自分の布を見つけました。王さまはふしぎに思つて、

「いったいだれが、わしの布をおまえにやったのだ」とききました。若者は答えました。

「王さまご自身が、わたしの手にまいてくださったのです」

若者は、頭から羊のぼうこうを取りました。すると、金色の髪たいようが太陽のようにかがやきました。若者は、

「命の水を取つて来たのも、命のぶどうを取つて来たのも、わたしです。上のふたりの婿たちの、耳と背中をもらってください。ふたりは、命の水の代わりに耳たぶをわたし、命のぶどうの代わりに、背中をけらせたのです」といいました。王さまを見ると、まさにその通りでした。

王さまは、若者がすっかり気に入つて、あらためてはなやかな結婚けっこんしき式を行いました。

そして、王さまがなくなると、若者がこの国おきを治めました。

村上郁再話

資料『世界の民話20コーカサス』小沢俊夫編訳／ぎょうせい